

あとがき

小関 素明

2023年3月に刊行した準備号にひきつづき、今回創刊号が発行できたことで『加藤周一現代思想研究センター報告』も学術研究雑誌として本格的な歩みを開始したといえる。本研究センターの末席に名を連ねるものとして歓びにたえない。これもひとえに加藤周一の蔵書が本学図書館に寄贈されて以来、研究センターの立ち上げ、その活動の充実化に向けた鷺巢力氏、加國尚志氏、半田侑子氏のご尽力、故渡辺公三氏をはじめとした学内外の関係各位のご協力の賜である。改めて感謝申し上げたい。

門外漢ではあるが、全体を通読させていただいて、前号と同様の充実した内容に感嘆した。加藤周一が引き寄せ、また喚起する研究対象と問題意識の豊饒さ、それに全力で応えようとする諸研究者の熱意の結集に目を見張る思いである。それに関して、筆者が気づいた特色をいくつか挙げてみたい。

まず第一に、本研究センターが年1回主催している記念講演会の成果が着実に反映されていることである。巻頭に掲載されている姜尚中氏の「剣には剣か、ペンは無力なままか」がそれである。現在われわれの目前で進行しているウクライナ紛争を事例に、時勢に流されがちな「大衆による理性」に対峙すべき「国家による理性」の重要性を説いておられ、まさに理想と現実の緊迫した関係をいかに構築すべきかという強靱な問題意識と姿勢に下支えされた迫力のある論稿である。加藤や丸山真男の問題意識と共振するものであり、たんなる妥協や政治戦術とは異なる切迫した実践倫理の迫力がわれわれの精神を陶冶せずにはおかない論稿であ

る。

第二に、知識人の基層への踏み込みがなされている点を挙げたい。本号で取り上げられている母と宗教の影響は、知識人の思想の基層を構成する重要な要素である。準備号で取り上げられた丸山真男の母（セイ）、加藤周一の母（織子）につづいて本号では鶴見俊輔の母（愛子）が取り上げられている。幼少期における彼らにとっての母は敬慕、崇敬、恐懼の対象であり一括はし難いが、そうした母との関係が彼らの人格や思想の中にどのように投影されているのか、また「丸山・加藤・鶴見の付属物」とどまらない「知識人を生み育てた」母の存在を個人としていかに捉えるべきなのかなど、興味深い論点が開示されている。宗教の影響とともに、今後の研究のさらなる深化が期待される。

第三に、対象の広がりやを挙げたい。加藤周一の研究を起点にして研究活動を推進している本研究センターではあるが、本号ではその対象が林達夫、丸山真男、鶴見俊輔、横光利一などへと広げられている。それは加藤の交友関係が広汎であったというだけでなく、加藤の問題関心がそうした各分野のキーパーソンを引き寄せずにはおかないためであろう。それは加藤の思想がそうした各分野に広汎な波紋を引き起こすポテンシャルを秘めていたことの証左でもある。直接論文で触れられている人物以外にも、鷲巢力氏への聴き取りというユニークな企画においては、鷲巢氏のライフヒストリーの語りのなかで京極純一、藤田省三、小林直樹、吉本隆明、香内三郎、日高六郎、竹内好などそれぞれの分野を代表する人物との邂逅について触れられている。この内の何人かの思想は、いずれかの箇所に加藤の思想とも触れあう内容を含んでいる。私はここに、外国人思想家や知識人が研究対象に加わっても何ら問題は無いと考えている。さしあたり、加藤の思想形成に大きな影響を及ぼした、もしくは加藤の問題意識と交錯する外国人思想家・知識人から手はじめに、研究対象を広げてみてはどうであろうか。

さらにこれとは別に半田侑子氏は、鮎川信夫など加藤やマチネ・ポエティックに批判的な立場に立った人物の論評や作品にも目を配った加藤論を近く公刊されるやに聞き及んでいる。こうして、加藤に導かれる形で研究対象が波状的に広がっていくのは、本研究センターが「加藤周一現代思想研究センター」という名称に相応しい研究拠点として発展していく徴候として歓迎したい。

後世に大きな影響を与えた大思想家を研究する際の常道にもれず、本号には「加藤周一への研究」と「加藤周一からの研究」の双方が含まれている。力作論稿をご寄稿いただいた学内外の研究者の方々に改めて感謝申し上げます。発掘した未公刊資料を有効に活用した基層への肉迫が、広汎な研究対象と研究者を呼び寄せていく。まさに本誌がそうした近現代日本思想史研究の肥沃な土壌となることを期待したい。

読者諸賢のかわらぬご支援を切望する次第である。

(おぜきもとあき 加藤周一現代思想研究副センター長)